

《あとがき》

本書は、西方教会最大の教父と言われるアウグスティヌスの生涯と信仰（神学思想）について、徹底的に彼の著作に即して、その執筆順に、彼自身の言葉によって描き出そうとした優れた講演録です。

それにしても、なぜ「397年」なのか？ いったい何があった年なのか？

それが、おそらくはこの夏期信徒講座のチラシを見た者の、最初の反応だったことでしょう。講演は、その謎解きから始まります。

ひとりの人間の生涯を振り返ったときに、大きな跳躍を果たしたように見える、それはまた不思議な輝きを放っている「瞬間」があります。古代教父アウグスティヌスにとっての397年はそのような「瞬間」の一つでした。

講演によれば、397年とは、アウグスティヌスの不朽の名著『告白』が執筆され始めた年。同僚の司教や敬愛してやまなかったミラノの司教アンブロシウスを次々と天に送り、独りでヒッポの司教として歩み始めた年。時にアウグスティヌスは43歳。そして、何より、地中海ならぬ瀬戸内海の地方都市岡山で牧会・伝道に励む講演者の柏木先生自身とほぼ同じ年（講演時に42歳）だったのです！

“そんなことに誰が気づくか！”という外の声をよそに、講演者はひたすらアウグスティヌス自身の内なる声に沈潜して行きます。それはまるで、この偉大な教父の“魂の遍歴”をともに追体験するような営みです。異教徒としての迷いの時から、真理の探求者へと導かれ、人間に与えられた意志の力に希望を見出した魂は、やがてそこから深い深い魂の闇に落ちると同時に、圧倒的な神の恩寵の光に照らされる者へと変えられていくのです。

柏木先生によれば、このアウグスティヌスとともに、彼が召された76歳まで共に歩んで行きたいとのことです。本講演は、アウグスティヌスの受洗後10年までを扱ったものですから、少なくとも、あともう2～3回は話をさせていただかねばならないでしょう。大いなる期待をもって！

（神戸改革派神学校 校長 吉田 隆）